

2023年1月1日（主イエス命名の日、A年）

牧師メッセージ

「イエスという名」

（ルカによる福音書 2:15-21）

司祭ヨセフ太田信三

教会の暦では今日はマリアから産まれた神の独り子が割礼を受け、その名をイエスと名付けられたことを祝います。多くの人の名前に意味が込められているように、イエスという名にも意味があります。「神は救いである」という意味です。

主イエスは律法に則り 8 日目に割礼を受けられました。主イエスはこのように律法の規定をことごとく身に受けられました。なぜなら、ガラテヤの信徒の手紙 4：5にある通り、「それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるため」でした。主イエスはわたしたちと同じ人となり、自らの命もろともわたしたち人間を神の子とするために、律法の規定通りのことを身に受けられました。主イエスはこうしてわたしたちと同じ人となり、これからのご生涯を通して、「神は救いである」ということを、わたしたちに具体的に示してくださいました。

イエスという名は珍しい名前ではありませんでした。たとえばヨシュア記のヨシュア、バルイエス、ユストと呼ばれたイエスなど、聖書にもその名がついた人間が沢山登場します。いわばありふれた名前です。しかしこのありふれた、ということにわたしは神の恵みを感じずにはられません。

神の恵みとか、愛とかわたしたちは言います。しかし、ときにそれが特別な誰かにだけ与えられているように感じられることがあります。ことに、自分が困難な状況にあるときや、この世界の本当にどうにもならない苦しみを知るとき、救いなどあるのだろうか、恵みなど一部のみにだけあるものなのではないか、と思えてきます。しかし、そうではない、ということが救い主に「イエス」という名前がつけられたことによって伝えられます。神の愛に、恵みに例外は無い、ということです。

たとえば、渋谷のスクランブル交差点で沢山の人が通り過ぎるのを眺めると、そこに一人ひとりの姿は景色としか写りません。しかし、その一人ひとりに家族があり、愛する人がいたり、それぞれの人生があります。神の眼差しは、この具体的なそれぞれの命に向けられています。特別な御子に、まことの王にありきたりな「イエス」という名がつけられたこと。これにより、ありきたりだとひとくくりにされてしまうような命をこそ、神は具体的に恵み、愛しておられることを、神がお示しになったからです。

神の恵、愛は、今このときにもすべての命に及んでいる。それは、いうなれば、神の思い、神の愛は当たり前のようにこの世界に満ち溢れている、ということです。

マリアもヨセフも、御子の名前を天使の告げるままに付けました。たとえば先祖の誰かの名前とか、自分たちで付けたい名前をつけるのではなく、神の意志を、思いを受け取り、それに従いました。わたしたちも、このマリアとヨセフの信仰に習い、イエスという名によって示されている神の恵みを感じ、受け取り、自らの思い出はなく、神の思いに従って歩んでいくことができますように。